



今回の紙面

- ◆地域医療最前線 NO. 53 《内藤篤 理事長》 ◆看護師さんのページ NO. 33 《三浦瞳 看護部長》
- ◆研修医のページ NO. 36 《磯田和樹先生》
- ◆平成 25 年度ワークライフバランス事業報告書 ◆中四国地域医療フォーラム
- ◆平成 25 年度春季地域医療実習意見交換会・懇親会



間ドック・健診（予防医療）をひとつの柱として、一般病床120床の松江記念病院を開設しました。平成12年4月、高齢者の自立支援と尊厳の保持を基本理念とする介護保険法が制定されたことを受け、訪問看護ステーション、通所リハビリテーションセンターを開設、介護療養病棟を増築し、リハビリテーションスタッフも増員しました。その後、地域完結型医療の推進にむけて病院機能が明確にされ、当院は急性期病院を支える後方支援病院としての役割を担うため、平成15年、一般病床を61床とし、医療療養55床・介護療養56床と療養病床を増床し地域の二



医療法人社団創健会 松江記念病院
理事長 内藤 篤



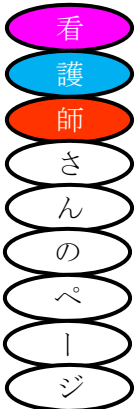
NO. 53

昭和61年4月14日、松江市上乃木宇賀の地に「ふれあいと健康をもとめて」を理念に、当時としては新しい試みの人



平成25年12月29日より当院において休日救急診療室が開設されました。医師会の先生方とともに初期救急医療を行い、さらに入院治

ーズに広げて参りました。できる限り家で療養したいと考えておられる患者さん・家族を支えるため、平成24年6月に在宅医療支援病院の認可を得、25年4月からは、副主治医として「かかりつけ医」不在時の対応を担う在宅医療支援ネットワークを立ち上げ「かかりつけ医」とともに松江の南地区の在宅医療を支援しています。近年松江市における年間5万件の救急患者が、救命救急センターを有する松江赤十字病院や、救急告示病院である松江市立病院、松江生協病院の3病院に集中している状況の中、平成24年6月、松江赤十字病院救急専門医退職により救急医療の現場で働く医師の負担が増え危機的状況になりました。これに対して松江市・松江医師会を中心に検討が重ねられ、病院勤務医の疲弊軽減を図り救急医療の崩壊を防ぐため、



NO. 33

公立邑智病院

看護部長 三浦 瞳

浜田自動車道から瑞穂インターを降りて雲海ロードを走ると、眼下に於保知盆地が広がります。四季の移り変わりの中でいろいろな顔を見せてくれる盆地の真ん中に、我が邑智病院があります。邑智郡は、人口2万人、高齢化率41%と島根県の中でも高齢者の多い地域です。

療が必要な方への二次的な対応も行っていきます。休日救急診療室は、年末年始は1日平均50人、その後の日曜祝日は30〜40人の患者さんの利用があり、平成26年2月19日の休日救急診療室検証会議においても急性期病院の負担軽減になったとの評価がありました。

今後、後方支援病院、在宅支援病院としての役割に加え、様々な介護サービスとの連携を図る取り組みを進め、医療と介護の連携を更に強化し地域医療に貢献したいと考えております。



邑智郡を構成する3町が共同で運営する邑智病院は、98床の一般病床を持つ郡内唯一の救急告示病院として、この地域で生活する住民の健康と安心を守っています。

小規模の病院だからこそ、すべての職員が、生きがいややりがいを持ってお互いに協力していこうという方針の中で、病院の経営を意識しながら目標を持って働いています。

地域が必要とする医療を提供するために、看護師も広い範囲で対応できるジェネラリストであることが必要です。院内・外の研修や学会への参加、病院や自宅で学習できる衛星研修・オンライン研修を取り入れています。

邑智病院はICLS、BLSOなどの救急研修を開催しています。看護師も受講生として積極的に学習し、その後は研修会スタッフとして活躍しています。



BLSOコース参加者集合写真(CMDの加藤先生は半袖で雪の中へ！)

す。そして研修会後の交流会では、邑智病院スタッフが登場し、見事な芸をお見せします。スイッチが入った時の活躍は素晴らしいものがあります。ぜひ、研修会に参加し邑智病院名物の芸を見ていただきたいと思います。

医師の少ない地域の病院だからこそ医師と連携し、共働して活躍する看護師の存在が必要であると考え、育成を行っています。院内業務限定で特定行為実施院内資格認定を受けた看護師が、院内認証をされた業務について、担当医師の具体的な指示のもと研修を続けています。医師と看護師の間で、医師と患者・家族との間で身近な信頼される存在になれると期待しています。

一方、高齢者が多い地域として、老人看護と継続看護に力を入れています。老人看護に関しては、2年前から専門看護師を講師に招いて研修会を開催してきました。地域の病院や施設に参加

分岐介助実習



を呼び掛け、毎回事例を取り上げ、意見交換をして振り返っています。老人看護への理解と共に、患者へ

の対応が変わってきたと感じています。継続看護は、入院時から地域連携室と情報共有シートの活用、初期カンファレンスなどで連携を取りながら、退院後の生活を意識した継続看護の展開を目指しています。

今後、地域包括ケアシステムの構築が進んでいく中で、病院が向かう方向を見据え、この地域での看護の在り方を考えていきたいと思います。



NO. 36



益田赤十字病院

1年目研修医

磯田 和樹



私は昨年4月より益田赤十字病院にて初期研修をさせていただきます。時が経つのは早いもので、もうすぐ研修スタートから1年が過ぎようとしています(執筆時はまだ3月です)。研修が始

が自分一人だけ、かつ私的なことですが故郷を離れての初の一人暮らしということもあって、仕事面だけでなく私生活においても不安と緊張でいっぱいでしたが、2年目の研修医の先生方、各科の指導医の先生方、さらに看護師・技師・事務職員等の方々に支えられて今の自分があります。

当院の研修の特徴は、研修医の数が少ないため(3月時点で5人)、各科の熱心な指導医の先生方のバックアップのもと、多くの手技を行うチャンスに恵まれており、様々な経験を積むことができるという点です。また各科の間の垣根が非常に低く、医局も一つの大きな部屋しかなく、科ごとの特別な仕切りも存在しないため、他科の先生同士が「〇〇先生、××の件よろしく〜」「はい、わかりました〜」といった光景も日常茶飯事です。

そんなアットホームな雰囲気の中で研修を続けて1年が経とうとしている中で、最近よく考えるのは、自分はこの1年間でどれだけ成長できたかということです。もちろん各科のローテートで採血、ルートキープ、缝合・結紮、エコー、内視鏡などの技術的な面だけでなく、患者さんに向かう時の姿勢、患者さんとの接し方、同僚との付き合い方など幅広く学ばせて

いただき、またそれを少しでも多く吸収しようとする努力し、少なくとも1年前の自分よりは多少なりとも成長できているだろうと思います。もしその1年前の自分が今の自分を見た時に、当時の自分が2年目研修医の先生方に対して抱いた「すごいな、1年間でこれだけできるようになるのか、自分も1年後にはこういう風になれるのだろうか」という思いを、今の自分に対しても抱いてくれるだろうか、もしそうだったらいいし、そうでなければもつと努力しなければ、と思いつながら日々研修に励んでいます。

初期研修期間は残り半分となりましたが、これからは今まで以上に気を引き締めて、過去の自分に「すごい」と言ってもらえるように、日々精進していきますので、皆さんどうかよろしくお願ひいたします。



平成25年度ワークライフバランス 事業報告書

島根大学医学部地域医療支援学講座は、今年度、しまね地域医療支援センターの研究受託で、平成25年4月1日現在の県内の医療機関の就労環境調査と女性医師の満足度調査を行いました（調査対象：医療機関53施設（回収率86%）、女性医師246名（回収率56・5%））。

各医療機関のワークライフバランス支援体制の整備は、3割程度が取り組んでおり、育休中・再就職前等の再教育プログラムは、看護師への導入は見られましたが、医師への導入はありませんでした。また、ジョブシェアリング制度（注）の導入施設もありませんでした。

女性医師の満足度調査では、上司・同僚との協力関係は良好である反面、仕事へのキャリアや研修・研究環境、有給休暇の取得状況についての満足度は低い状況でした。また、育児・復職環境では、業務免除制度を設けている施設において、約20%の女性医師が利用できるという回答していましたが、制度があっても利用が難しい状況が調査結果から垣間見えました。また、必要性に

ついての調査では、日当直・オンコール免除について95%が必要と感じており、今後は、院内保育・病児保育、学童保育等の必要性が高くなると考えられます。

今後取り組むべきこととして、①全県的に検討・対応するネットワークの構築、②各医療機関の勤務環境整備・促進支援、③個人々に応じたキャリア相談・支援のための相談窓口の設置、④キャリア支援や就職先斡旋や復職後支援、⑤学生へのキャリア教育や制度の見える化、職員・住民への啓発などが必要と考えられます。

（注）ジョブシェアリング
通常、フルタイム勤務者1人で担当する職務を2人以上が組になって分担し、評価・処遇もセットで受ける働き方。仕事と育児、介護などとの両立を可能にするワークシェアリングの一形態

【地域医療支援学講座 吉岡】



中四国地域医療フォーラム

中四国地域医療フォーラムが3月8日、出雲市内で開催されました。このフォーラムは、地域枠学生の支援等を行っている中四国各県の大学の講座が主催者となり各県持ち回りで開催しており、今回で4回目です。今回は、中四国各県から大学、地域医療支援センター、県の関係者及び医学生、合わせて約60名が参加しました。

「地域枠学生の学部教育と卒後キャリアパスについて」というテーマで各大学から現在の取り組みが報告された後、参加者が7つのグループに分かれて「地域医療志向の学部教育を充実させるために」「卒後のキャリアパスの充実のために」というテーマでワークショップを行い、熱心に議論を交わしました。ワークショップを通じて他県の方と話をする



中で、地域枠学生・地域枠出身医師への支援のため各県とも多様な取り組みをされていることが分かりましたが、卒後のキャリア形成支援については、大学医局との調整、専門医取得とへき地勤務の両立、結婚・出産・育児に伴う離職防止、診療科偏在への対応などが各県とも共通の課題となっているように感じました。また、参加した医学生からは、新専門医制度に関する情報提供や県外に一旦出た後戻ってくる場合の受入体制づくりなどの要望がありました。

地域枠出身の医師の方が年々増えてきており、各大学や各県も目の前の課題に対応しながら制度の見直しや拡充など試行錯誤を重ねています。地域枠医師の県をまたぐ異動など広域的な視点で考える必要性のある課題も出されました。今回のフォーラムは、中四国各県の連携を一層進め、課題の共有とより良い対応策を考えるための貴重な機会となりました。

【医療政策課 池田】



グループ発表の様子



ポイントを使って実習の成果を発表しました。また、初めての試みとして、六日市病院とTV会議システムで結び、

**平成25年度春季地域医療実習
意見交換会・懇親会**

3月3日、島根大学医学部で春季地域医療実習の意見交換会と懇親会が行われました。

地域医療実習は、島根県から奨学金の貸与を受けた医学生や、島根県出身の自治医科大学在学中の学生など、地域医療に関心を持っていく医学生を対象として、毎年度、夏季と春季の2回、中山間地や離島の医療機関等で実習を行うものです。

今年度2回目となる春季地域医療実習は、島根大学の2～4年生15名が参加し、2月下旬に県内7地区の医療機関等で行われました。

この日の意見交換会では、学生が実習地区毎にグループに分かれ、パワー

意見交換会に参加した学生、関係者の皆さん



重富先生にも参加いただきありがとうございました。発表では、実習先で先輩医師の後ろ姿を見て、患者

とのコミュニケーションの取り方や医療従事者との連携の重要性などを学んだことや、地域医療機関では、患者の家族構成や生活背景を熟知し、地域に根差した医療が行われていることなどが報告されました。

意見交換会後に行われた懇親会は、学生の参加が少なかったのが残念ですが、参加者同士の交流を深めることができました。

今回の実習でお世話になった医療機関や保健所をはじめ、多くの関係者の方々のご協力に改めてお礼申し上げます。

【医療政策課 宍倉】



島根県で勤務していただける方を紹介してください

友人・知人に島根県での勤務を希望される医師がおられましたら、是非ご紹介ください。ご紹介いただいた先生には、医療機関の情報等を提供し、U・Iターンを支援します。

医師募集・地域医療視察ツアー参加者募集

島根県は県内で勤務いただける医師を求めています。全国どこへでも専任の医師が出張し、具体的な相談に応じます。また、地域医療の視察ツアー（県負担）を実施しています。お気軽にお問い合わせください。

「赤ひげバンク」の登録者のみなさんへ

住所等に変更があった場合は、メールでお知らせ願います。

携帯からの問い合わせはこちら

〒690-8501 松江市殿町1番地 島根県健康福祉部 医療政策課 医師確保対策室
TEL 0852-22-6684 FAX 0852-22-6040
E-Mail iryyou@pref.shimane.lg.jp
ホームページ：[島根の医師確保対策](#)

